

お弁当

キーンコーンカーン。四時間目の終了のチャイムが鳴った。

「やったあ。お弁当の時間だ。」

咲希や優人の中学校では、昼食にはお弁当を持ってくることになっている。

「いただきます。」

と優人が食べようとすると、隣の席の咲希が優人のお弁当をのぞき込んで、

「わあ、おいしそうなお弁当。優人さんのお母さんて、お料理上手なのね。」

と言った。

「あ、この弁当？ これは僕とお父さんとで作ったんだよ。」

と優人が言った。

「え？ お母さんは料理をしないの？」

と咲希が聞いた。

「するよ。僕のお母さんは病院に勤めていて、夜中に働くこともあるから、弁当作りは、僕とお父さんがするんだ。」

と優人が答えた。すると、咲希は感心して言った。

「へえ、優人さんもお父さんもお料理が上手なんだね。」

「最初は、失敗もしていたんだ。でも、料理は経験を積み重ねれば上手にできるようになるよ。お母さんも疲れて帰ってくることもあるから、僕は自分にできることをするようにしているよ。」



「私もお母さんと二人暮らしだから、弁当は自分で作るよ。まだ、あまり上手じゃないけれどね。」

と親友の明日香も笑って言った。

ふと、咲希は昨夜の自分の家族の光景を思い出していた。

「ただいま。部活でくたくた。あれ、お母さんは？」

と咲希はテレビを見ている父と兄に声をかけた。

「お帰り。お母さんはまだ会社だよ。」

と父が言った。なんだか怒っているように見える。最近、お父さん、いらいらしているなあと咲希は思った。

「お母さん、係長になってから、毎晩遅いなあ。」

と兄が言った。

しばらくして、母があわてて帰ってきた。

「みんな、ごめんね。遅くなっちゃった。」

「もう、おなかぺこぺこだよ。」

と兄が言った。

「こんなに毎日遅くなるんだったら、係長なんかにならなければよかったな。」

と父がテレビを見ながら言った。

「咲希ちゃん、晩ごはんを作るの手伝ってちょうだい。」

と洗濯物を取り入れながら、母が明るく言った。

「えっ、私だけ？ いつも私ばかり。」

と咲希はしぶしぶソファから立ち上がった。咲希が兄と父の方に目をやると、二人はテレビの画面を見るときもなしに眺めていた。

「咲希さん、咲希さん。」

優人の呼びかけに、咲希ははっと我に返った。

「あ、何？」

「咲希さんのお弁当は誰が作っているの。」

と優人がたずねた。

「お母さんよ。今まで、お母さんが作るのが当たり前だと思っていただけです。」

と咲希は答えた後、物思いにふけていた。



その日の帰り、咲希は町でばったりと保育園の時の先生に出会った。

「まあ、ずいぶん大きくなりましたね。お母さんもお元気ですか？」

あなたのお母さん、毎朝一番早くあなたを保育園に預けに来られて、お迎えもいつも時間ぎりぎり、息を切らせながら走って来られてましたよ。」

「ご迷惑をかけていたんですね。」

「そんなことなかったのよ。お母さんは、『保育園の先生方に申し訳ないし、ちょっとでも早く迎えに来てやりたいので』といつも明るく言っておられましたよ。あなたがこんなに立派になって、お母さんも喜んでおられるでしょうね。」

その日の晩、咲希が帰宅してリビングの戸を開けると、父と兄がテレビを見ていた。

「ただいま。お母さん、まだ？」

「お母さんは今日も遅いって。」

と兄が言った。

「お兄ちゃん、私たち二人で晩ごはんを作ってみようか。」

と咲希が、思い切って言ってみた。

「ええっ、なんで。僕には料理なんか無理無理。」

と兄は嫌がった。

「同じクラスの優人さんは、お父さんとお弁当を作っているよ。友だちの明日香さんも自分でお弁当を作っているんだって。」

「へえ、中学生なのに偉いね。でも、僕たちの家は違うよ。」

と兄が言った。咲希は言葉が続けた。

「他の家では家族みんなで助け合っているんだよ。私たちの家は昔からお母さんが一人で家事をしてきたよね。お母さんは仕事で疲れていても、家事をほとんど一人でやってきたのよ。私たちも大きくなったんだから、できることをしてみようよ。」

そして、保育園の先生が話してくださったことと、その時思ったことを兄に話してみた。

しばらく考え込んでいた兄が言った。

「うん、そうだね。お母さんは係長としても頑張っているんだ。やってみるか。」

咲希と兄が台所に行こうとすると、二人の話を黙って聞いていた父は、ベランダへ出て、照れくさそうに洗濯物を取り入れ始めた。

